

町並みを 活かしたまちづくり

〈あたりまえの中にある、かけがえのないものを探して〉

「保内大学」とは

八幡浜市保内町は、江戸末期から昭和初期にかけて、海運業や鉱山・金融業・蚕種業・紡績業・木蠟業など多様な近代産業で栄えた。明治11年には、伊予銀行の前身第二十九国立銀行が県内で初めてでき、四国で初めて電灯が灯ったと言われるなど町は活況を呈していた。当時の繁栄を物語るレトロな建物が、たくさん町には残っている。

保内大学の前身「保内まちなみ倶楽部」は、保内町に多く残る近代化遺産を残し伝えていく運動を展開した。倶楽部の活動もあり、平成6年、旧保内町は旧白石和太郎洋館を購入保存した。行政が町並みに少しずつ目を向けるようになった、大きな一歩である。また、宮内川河口に架かる「美名瀬橋」は、平成10年老朽化による架け替え工事の予定であったが、倶楽部・行政・業者の3者が一体となり、保存修復工事を行った。このように行政



修復された旧白石和太郎洋館での報告会

が民間の意見を取り入れて、修復工事を行う事は全国でも余り例がないようだ。その倶楽部の忘年会の席で、後に学長となる白石久晴より、「教養のない者は、景色が見えない。」というフランスの格言が紹介された。この言葉に誤解があつ



保内大学事務局
安藤 加代子
(八幡浜市保内町)

てもいけないが、いつも身近にある景色でも、きちんと観る目がないと美しい景色とはとらえられないという真理に、一同深く感動した。何とか自分達で学び、人も育つていく為には学校が必要だとの思いを強くし、平成8年4月「保内大学」の開講に至った。

大学は、「保内大学」学生の月額千円の受講料で運営し、手作りりで活動している。

開講後、江戸川乱歩賞受賞作家井沢元彦氏を講師に招き、講演会を開催。白石学長が、井沢氏の『逆説の日本史』を読み、いたく感動し招聘を企画。伝もなく、出版社に直接手紙を書き、先生に講師依頼の打診をしたが、なかなか連絡がとれずあきらめかけた半年後、やっと承諾の返事を頂いた。企画から1年後、120名の聴衆を迎えた時の感動は言葉にならない。

現在、学生20名、町並みを核とし、地域のイベントにも積極的に参加協力している。地域の夜市には、町並みの中にある明治31年創業の酒屋の蔵をお借りし、酒蔵喫茶としてオープン。日本酒を使ったカクテル、甘酒など、蔵ならではのメニューで、お客さんに喜んで頂いている。また「地域学」として、地元のもの知りのお年寄りを招き、繁栄当時の話を伺い記録をしている。

